

## 時代錯誤の人権意識調査

### いつまで続ける？ 誤った[同和]優先

6月11日の本会議一般質問で私は、今年の2月に鈴鹿市が出した「人権問題に関する市民意識調査」報告書の内容についてただしました。この調査は、2年前に市民3千人を対象としたアンケートを行ない、その結果をなぜか丸2年もかけて集計・分析したものです。その業務は毎年100万円、合計300万円で、松阪市のNPO（部落解放同盟系）を通じて大阪市大の野口という学者に丸投げし、その報告文書をそのまま市の「公式見解」にしています。

### はじめから設問の半分以上が「同和」という異常さ

2年前に市民に送られたアンケートは、設問22のうち「同和」に関するものが5、「同和」の入ったものが6と、すでに異常な構成です。例えば、【問15】もしあなたが買いたい住宅が、同和地区と同じ町内とわかったら、あなたはどうしますか？【問16】もしあなたのお子さんが結婚したいといっている相手が、同和地区の人だとわかったら、どうしますか？【問19】あなたの親しい友人に次のような人がいますか？ A同和地区出身者 B身体障害者 C精神障害者 D在日韓国・朝鮮人 E日系外国人  
こんな質問のオンパレードで、およそまともな調査とは言えません。

### 「差別のアリバイ調査」との指摘どおりの結論

私は当時の2006年11月議会で、「この調査は、いつまでたっても差別はなくなるという結論を出すためのアリバイ調査というべき代物で、有害無益、即刻中止すべきだ」と指摘しましたが、今回の報告書を見ると、ズバリ私の指摘どおりの結論になっています。次に具体的な内容を見ていきます。

# 数値が下がったのに「差別が潜在化 陰湿化」と、屁理屈でねじ曲げる

この誘導尋問のような質問でも、それでも市民の「意識」は正直に、数字に表れています。問4で、7つの人権問題についての関心を問う質問に対して「児童虐待」が一番多く、次いで障害者差別、女性差別という順位で、「部落差別」が一番下位になりました。しかし野口氏はこの数字を素直に見ず、「このことは今日の部落差別が潜在化、陰湿化の方向に変化しており、かつてのように先鋭かつ顕著に現れていない状況を反映している」と、まったく反対の「分析」をしました。

また、問14「結婚差別」について、10年前の調査との比較で「差別がある」との回答が15.4ポイントも下がりました。しかし野口氏は「一見改善の方向に向かっている、しかし一概に改善したとは考えられない」と否定。さらに「分からない」との回答が20.4ポイントも伸びたことを、「悲観的な見方をするものや解放の展望がもてないものが増えている」と決め付けています。「分からない」というのは、自分の回りでは結婚差別など見たことも聞いたこともないが、どこか他所にはあるかも知れないので「分からない」と答えたのです。せっかく市民の意識変化を示す数字が出たのに、野口氏にかけると「解放の展望がもてない」などとねじ曲げられるのです。

## いつまでも「差別はなくなるらない」と呆れた結論

このように数字を都合よくねじ曲げて、改善したこともすべて否定した挙句に、野口氏は市民が自由に意見を記入したものを「前向き意見」「後ろ向き意見」に勝手に分けて、同和利権や行政との癒着への当然の批判の声に、「元々あった偏見や差別意識が更に助長され強化されたととれる意見」などと、敵対心をあらわにしています。そして「同和問題は差別する人が存在し、また差別に同調したり、無関心であることから結果的に温存する立場にある人々が存在し続けることにより、無くなるないのである」と、偏った特異な立場からの理論を、調査の結論にしているのです。

野口氏の「理論」は、要するに「差別はいつまでも無くなるらないと言っていれば、自分の飯のタネも無くなるらない」という程度の代物で、こんなデタラメで有害無益な「調査」に、300万円もの税金を使ったことの間違いは明らかです。本当かと疑う方は、いちど調査報告書を読んでみて下さい。

# 後期高齢者医療制度は廃止せよ！

## 市民からの議会請願、賛成10人で不採択となる

6月議会に鈴鹿年金者組合から「後期高齢者医療制度の廃止を求める請願書」が出され、私が紹介議員になりました。4月の制度スタート以後、高齢者を75歳で問答無用に「線引き」し、保険料を問答無用に「天引き」するこの制度への国民的な怒りが高まり、国会では野党共同の「廃止法案」が参議院で可決されました。

しかし鈴鹿市議会では、委員会と本会議での審議、採決の結果、賛成10人（つまり反対21人）で「不採択」となりました。賛成した議員は、共産党2人と、市政研究会6人（森義明、市川義高、大西克美、中村浩、水谷進、市川哲夫）と無所属クラブ2人（板倉操、杉本信之）の各氏でした。

## 公明党は反省なく「改善を求める」請願を出す

年金者組合の請願と同じ日に、公明党が紹介議員として「運用面の改善を求める」請願を出してきました。これは国民的な批判の声を受けて、評判の悪い制度の「見直し」をとっているものですが、それなら昨年12月議会に年金者組合提出の「見直しを求める」請願に、公明党が反対したことを反省してから言うべきです。委員会で森川議員がそのことをただすと、公明党議員は「あれは制度が始まる前だったから」などと弁明していました。

また、保険料の引き下げなどの「運用の改善」はすでに政府が手を打って、6月12日に決定済みのもので、請願の意味そのものが無くなりましたが、いまだに取り下げもせずに「継続審査」扱いになっています。私は24日の本会議の討論でそのことを指摘しましたが、そのままになっています。公明党は政権与党として、後期高齢者医療の強行には重大な責任がありますが、そのことをきちんと認識しているのでしょうか。

---

## 伊船町に「森六」新工場が8月から操業開始

ホンダの大手下請け部品メーカー「森六」が、伊船町の「中央工業団地」（民間開発）に新工場を建設していますが、8月の盆休み明けから操業を始めるとの説明が、地元の役員にありました。敷地面積2万9千坪、労働者321人の大工場、わが伊船新田地区の風景が、ガラッと変わります。

ずいそう



## いろいろな「同窓会」

6月14日、私の恩師・静岡大学の居城教授の定年退官を記念して、歴代の居城ゼミ卒業生が一堂に会する「同窓会」が、大学で行なわれた。同窓生といっても、先生の在職35年の間の卒業生だから、上は私の年代から下は今年卒業したばかりの若者までという幅広さである。各人は自分の上下の3年くらいしか面識がないが、先生だけが全員を知っているという、不思議な会合であった。

それでも宴が盛り上がったところで、年代別に全員が自己紹介と近況報告をし出すと、なぜか昔からの知り合いのような感覚になってきて、夕方には大勢で町に繰り出して夜半まで二次会がにぎやかに続いたのである。卒業生の多くが各地の金融機関に就職し、バブル経済とその崩壊、金融構造改革などの荒波に翻弄されいくつも仕事を替わり現在に至っているが、この日ばかりは青春時代に帰ってワイワイと騒ぎ、恩師はニコニコと皆の話を聞いている。あの頃の居城ゼミナールの日々を再現した、楽しい一日であった。

### 時空を超えた連帯感と、恩師の人間性と

6月29日、こんどは私がかつて5年ほど所属した鈴鹿混声合唱団「すずこん」の「20周年記念」コンサートに、OBも一緒に歌うステージが企画され、そのお誘いに喜んで参加した。15年ぶりの市民会館の大舞台で現役百名余、OB70数名と共に歌う大合唱「大地讃頌」は感激であった。

その夜の打ち上げパーティーは、これも延べ20年の合唱団在籍者の、一種の「同窓会」であった。一度でも団に籍を置いた者は、総数500人にもものぼるそうであるが、去っていった者にもわざわざ出演の場を作ってくれる、そんな温かい心づかい、そんな居心地の良さが、この合唱団のいちばんのいい所である。

居城ゼミ35年、「すずこん」20年、それぞれの歩みの中で出来てきた特有の空気というかムードがある。その空気を中心は居城先生、また「すずこん」の指導者・桂先生の人間性であり、それを慕って集まった「教え子」たちの時空を超えた連帯感が、損得とはちがった価値を大事にする人間集団となっているのだろう。そんなことを強く感じた2つの同窓会であった。